

日本語の会話に見られる認識的スタンスの調整

中馬隼人(名古屋大学大学院生)

1. はじめに

日常会話の参与者たちは、ある事柄についてどの程度知っているのか、それを経験したことがあるものなのかを示しながらやりとりを行っている。このような参与者たちの知識や経験についての指向性は、認識性(epistemics)と呼ばれ、発話に用いられる言語資源によって、様々な形で示される(Heritage, 2012a; 2012b; 早野, 2018)。

本研究は、相互行為において示される話し手の認識的スタンス(epistemic stance)が、他の参与者の発話や応答によって調整されるデータを観察し、そのプラクティスがどのような相互行為上の問題を解決するために用いられるかを、会話分析の手法を用いて明らかにするものである。具体的には、(i) 認識的スタンスがK+からK-調整されるもの、(ii) K-からK+へ調整されるもの、という2つに分類し、それぞれがどのような相互行為場面で用いられているかについて分析する。

2. 認識的スタンスとは

認識的スタンス(epistemic stance)とは、相互行為の中でその都度示される、ある事柄についての会話の参与者の理解の度合いや態度のことを指す。これは、相互行為における他の参与者の(想定された)知識状態と相対的に決められるもので、他の参与者と比較してより知識があることをK+、より知識が少ないことをK-という形で表示する(Heritage, 2012a; 2012b; 早野, 2018 など)。近年、日本語会話において認識的スタンスがどのように示され、それがどのような相互行為上の問題の解決のために用いられているかについての研究が数多くなされている(遠藤・横森・林, 2017; Hayashi, 2012; Hayano, 2017 など)。以下、2.1で、認識的地位と認識的スタンスという概念について、2.2では、認識調整(Drew, 2018)について概観する。

2.1 認識的地位と認識的スタンス

会話の参与者がある事柄について知識や経験があるかどうかは、重要な事柄のひとつとして扱われる。例えば、参与者Aがある事柄について知らない場合、それについて知識を持っているであろう参与者Bに質問をする、といったことは容易に想像できるし、さらに、その認識性を示すために用いられる文法的資源は多様に存在する。

Heritage は、認識性について、認識的地位(epistemic status)と認識的スタンスの2つに区別した(Heritage, 2012a など)。認識的地位とは、会話の参与者たちが持っている(と想定される)特定の事柄についての知識や経験のことであり、安定性を持つものであると言える。一方、認識的スタンスとは、様々な文法要素や発話形式を用いて示される、会話の参与者のある事柄についての認識的な態度のことを指し、会話の中でその都度示されるものである。

2.2 認識的調整

Drew(2018)は、認識性が相互行為の中で調整されること(epistemic amendments)を指摘しており、発話途中、もしくは聞き手の沈黙の後に発話形式を変えることで、認識的スタンスをK+からK-へ、またはK-からK+へ調整する方法を挙げている。例として、以下のような事例が挙げられている。

断片(1) [Drew(2018, p.176), Doctor-patient, #11] (一部省略)

14 Doc: It must be pretty hard tuh be by yourself though:,

15 (1.5)

16 Doc: Isn' t it hard tuh be by yourself?

この断片では、医者が14行目で助動詞mustを使い、患者に対して「自分一人であることは大変に違いない」と認識性

の強い形で発話をデザインするが、15 行目で患者からの応答が無いことを受けて、16 行目で否定疑問文を用い、認識性を弱めた形で発話している。本研究では、Drew(2018)では述べられていない「話し手の発話に対する聞き手の発話や応答があった後に認識性が調整される」データについて分析を行う。

3. データと方法論

本研究では、筆者が収録した日常会話のビデオデータと Callfriend JAPANESE コーパス (MacWhinney, 2007) の電話会話の音声データを使用した。前者は、[snackparty] と [collegestudents]、後者は、[callfriend] という名前で示している。また、分析については、会話分析 (conversation analysis) の方法論を用いて行った。

4. K+からK-への調整

本節では、話者が他の参加者の応答に応じて認識的スタンスをK+からK-へ調整する2つの事例について見ていく。

4.1 確認要求の後の応答に対する認識的調整

以下に挙げる断片は、大学生時代からの友人である男性2名による日常会話である。この断片の前では、「茨城」のことが話題になっており、茨城県出身の有名人が複数名挙げられていた。そのうちの1名である、「ピースの綾部」が茨城県出身であったかどうかを、01 行目でリュウタが思い出しており、03 行目でその確認要求をタカシに対して行っている。

断片(2) [snackparty]

- 01 リュウタ ↑ あれ。あれちがったつけくピースの:ワタベ。え:あ: >ワタベじゃなくて<綾部.=
02 タカシ =綾部か。
03 リュウタ → うん。あれ茨城じゃなかったつけ.=
04 タカシ =いやわかんない.=
05 リュウタ → =俺も分かんない。

リュウタは、03 行目で「あれ茨城じゃなかったつけ。」という形式を用いて、「ピースの綾部が茨城県出身であることをかつては知っていたと思うが、今は確かではないため、そのことを思い出している最中である」ことを示しつつ、聞き手であるタカシに、そのことを思い出す手助けをしてもらうために、確認要求を行っていると考えられる (Hayashi, 2012)。またこの03 行目の発話は、確信度が低いためK-の認識的スタンスではあるが、かつては知識を持っていたということを示しているため、完全なK-ではなく、僅かながらK+の要素を含んでいると考えられる。

それに対してタカシは、04 行目で「いやわかんない。」と質問の命題内容についての知識を全く持っておらず (K-)、確認要求に応えられないことを示している。そして、05 行目でリュウタは「俺も分かんない。」という発話を用い、03 行目の発話で表示した僅かながらK+の要素を含んでいるK-のスタンスを、完全なK-のスタンスへ変更し、認識性を調整している。

確認要求という行為は、聞き手が話し手より当該の事柄について知識があるという話し手の想定を示し、聞き手による確認付与という応答を適切にする。この例では、リュウタの想定に反してタカシが確認付与できないという相互行為上の課題が生じている。それを解決するために、リュウタが03 行目の発話に僅かに含まれるK+の要素を05 行目で無くし、思い出すことを手助けしてもらうための確認要求を放棄することで、タカシの方がより知識があるという想定をキャンセルし、04 行目のタカシの応答を問題がないものとして扱っている。

4.2 情報伝達への他の参加者による異議に対する認識的調整

以下に挙げる断片は、同じ会社に勤めているAとBが人事についての情報交換をしている電話会話である。異動者を知らせる資料について話しており、Aは役員クラスの異動者のリストをもらっていないと述べている。

断片(3) [callfriend4164]

¹ お笑いコンビ「ピース」のメンバーを指す。

- 01 A あの:::, 役員クラスもらってないんだよねまだね
 02 B → 役員? 副社長 2 人.
 03 A ° 副社長 3 人°
 04 B ↑ え? 3 人?
 05 A 3 人でしょ?
 06 B → あれ 3 人だっけ?

A は, 01 行目で, 異動者の資料について, 役員クラスはもらっていないと述べる. このことから, B は 02 行目で A が役員についての情報を全く持っていない者として扱い, その事柄についての情報 (副社長が 2 人であること) を提供している. それに対して, 03 行目で A は, B による情報とは異なる情報 (役員の副社長は 3 人であること) を提示することで, 02 行目の B の発話に異議を唱えている. その後, 06 行目で, 「あれ 3 人だっけ?」と「っけ」という文法的要素を付加する (Hayashi, 2012) ことで, 自ら示した認識的スタンスを K+ から K- (ただし, 完全な K- ではない) に調整している.

ここで重要なことは, A と B との間に, 「副社長は 2 人だ」, もしくは「副社長は 3 人だ」という認識のズレが生じているということである. この相互行為的な問題を解決するために, 認識性を格下げ (downgrade) しているわけだが, なぜこのようなことが起きているのだろうか.

01 行目の A の発話を受けて, B は 02 行目で A に役員クラスの人事についての情報伝達を行った. このことから, B は A を役員クラスの人事についての情報を持っていない者として扱っていることが分かる. しかし, 本来ならば情報伝達は, 次の位置で「情報の受け取り」(「へー」など) が来ることが適切となるにも関わらず, 03 行目で, B の情報への異議がなされている. さらに, 05 行目で「3 人でしょ?」と, 情報への異議が繰り返行われている. その後, B が, 認識性を格下げし, 02 行目の K+ の認識的スタンスを 06 行目で K- に調整している. ここから理解できるのは, A にも役員人事についての情報を何かしらの形で知りえるという認識的権利 (epistemic rights) があることを認めていることに指向していることである. このようにして, 認識的スタンスを調整し相手に認識的権利があることを認めることで, A と B との認識的ズレにより生じうる, それぞれが持つ情報の主張の衝突という相互行為上の問題を回避するための 1 つの方略になっている.

5. K- から K+ への調整

本節では, 話者が他の参加者の応答に応じて認識的スタンスを K- から K+ へ調整する事例について見る². 具体的には, K- として産出した質問が, 複数いる聞き手の一部から応答が得られたため, 発話要素を付加することで, K+ に寄せた質問の形式に調整する事例である.

断片 (4) [collegestudents_]

((同じ大学に通う男女 4 名による日常会話. それぞれが所属するゼミのメンバーでゼミ旅行に行ったことが話題である.))

- 01 ユミ > いやさく みんなゼミ旅行は申請した? ((視線をナオコに向ける))
 02 ナオコ うん. ((nod))
 03 ユミ 人たちだよな? ((サオリ, ケンジの順番で視線を向ける))
 04 サオリ [うん. ((nod))]
 05 ケンジ [うん. ((nod))]

01 行目で, ユミがゼミ旅行の費用を大学に申請したかどうかについて質問をしている. ここでは「みんな」という言葉を使っていることから, ナオコ, サオリ, ケンジに向けてこの質問がなされていることが分かる. このとき, ユミの視線はナオコのみに向けられており, それに応答する形で, 02 行目でナオコが「うん」と返事をする. このとき, サオリ, ケンジは 01 行目のユミの質問に対して, 応答をしていない. 03 行目で, ユミは自身の 01 行目の質問に発話要素を付加する形で 03 行目で「(みんなゼミ旅行は申請した) 人たちだよな?」と質問をサオリ, ケンジへ向けに行っている. その後,

² ここで注意しておきたいのは, 質問に対して応答がなされ, それを受け取ることによって K- から K+ へ認識性が変化するものは, 除外されるということである. 例えば, A が「課題の提出っていつだっけ?」という質問を行い, B が「来週の水曜日だよ」と応答し, A が「あ, そうなんだ. ありがとう」という受け取りを行うような例を考えてみる. この例では, A が何らかの相互行為的な問題を解決するために認識的スタンスを調整しているというより, A の「課題の提出はいつなのか?」という事柄についての認識的地位が, B の応答によって K+ から K- に変化していると言える. よって, このような事例は, 認識的調整の事例からは除外される.

04, 05 行目でサオリとケンジの2人から「うん」という応答が得られている。

ここでは、自身の先行発話の質問に新たな発話要素を付加する際に、認識性の調整が行われている。01 行目のユミの「みんなゼミ旅行は申請した?」という質問の形式から、当該命題についての知識が無い、K-のスタンスで発話が組み立てられていることが分かる。さらに、03 行目では「だよね?」というある程度の確信性を持った言語要素（つまり K+のスタンスを含んだもの）が、ユミ自身の1 行目の質問に付加されている。これによって、ユミの質問が、K-からある程度 K+の要素を含んだ K-へ、認識性が調整されていることが分かる。では、なぜこのような認識的調整が行われているのだろうか。

ユミが質問の対象をナオコ、サオリ、ケンジとしたにもかかわらず、おそらく視線をナオコのみに向けていたことが理由で、ナオコからしか応答が得られなかったという相互行為上の問題が生じている。これに対して、「2 人はゼミ旅行申請した?」のように、新たな質問を行うという対処をせずに、02 行目のナオコの肯定的な応答を資源として利用し、なおかつ 01 行目で行った自身の質問に「サオリとケンジも肯定的な応答であると推測する」発話要素を付加する形で、サオリとケンジへ視線を向けて質問を行っている。このことから、ユミが認識的調整をすることで、3 人を1 つのグループとしてみなすことに指向していることが理解できる。紙幅の都合で掲載できていないが、この断片の後、ユミは、大学に予算申請をせずにゼミ旅行に行ったために、自腹でお金を払ったという自分の経験を報告する。この行為が適切に行われるためには、ゼミ旅行の予算申請をしたグループとそれ以外の者（つまり、ユミ）、という対比的な構造を明示的にしておく必要がある。しかし、02 行目でナオコのみが応答することで、その前提が分かりにくくなるという相互行為的な問題が生じ、それに対処するために、認識的調整を行い、3 人を1 つのグループとして扱っていると考えることができる。

6. おわりに

認識的スタンスを調整することは、相互行為上の様々な課題を解決するために用いられている。今回注目したような事例を分析することは、前述の Drew (2018) の議論に、「受け手の発話や応答によって認識的スタンスを調整する」という方法を加えることで、認識的調整に関する理解を深められるという点で意義があると考ええる。

今回は、受け手の発話や応答による認識的スタンスの調整の様々な事例を概観したにすぎなかったが、今後の展望としては、特定の連鎖環境に的を絞って、データのコレクションを行い、一定のプラクティスを見出していくことが挙げられる。また、認識的調整によく使用される言語資源に注目し、それがどのような相互行為上の課題の解決に用いられているかを探ることも重要だと考えている。

謝辞 本稿の執筆にあたって、林誠先生（名古屋大学）、横森大輔先生（九州大学）、伊藤亜紀氏（名古屋大学大学院生）から有益なコメントを頂いた。心より感謝申し上げる。

参考文献

- Drew, P. (2018). “Epistemics in Social Interaction.” *Discourse Studies*, 20(1): 163–187.
- 遠藤智子・横森大輔・林誠 (2017). 確認要求に用いられる感動詞的用法の「なに」: 認識的スタンス標識の相互行為上の働き *社会言語科学*, 20(1), 100–114.
- Hayano, K. (2017). “When (not) to Claim Epistemic Endependence: The use of *ne* and *yone* in Japanese conversation.” *East Asian Pragmatics*, 2(2): 163–193.
- 早野薫 (2018). 認識的テリトリー ―知識・経験の区分と会話の組織― 平本毅・横森大輔・増田将伸・戸江哲理・城綾実 (編) *会話分析の広がり* ひつじ書房 pp. 193–224.
- Hayashi, M. (2012). “Claiming Uncertainty in Recollection: A Study of Kke-Marked Utterances in Japanese Conversation.” *Discourse Processes*, 49: 391–425.
- Heritage, J. (2012a). “Epistemics in Action: Action Formation and Territories of Knowledge.” *Research on Social Interaction*, 45(1): 1–29.
- Heritage, J. (2012b). “The Epistemic Engine: Sequence Organization and Territories of Knowledge.” *Research on Social Interaction*, 45(1): 30–52.
- MacWhinney, B. (2007). The TalkBank Project. In J. C. Beal, K. P. Corrigan. & H. L. Moisl (Eds.), *Creating and Digitizing Language Corpora: Synchronic Databases*, 1: 163–180. Houndmills: Palgrave-Macmillan.